

第3回清水町みらい会議要旨

○開催日 令和2年7月30日(木)

○会場 清水町役場3階 大会議室

○出席者(委員)

- ・岩崎 清悟 座長 (静岡ガス株式会社 特別顧問)
- ・中山 勝 副座長 (一般財団法人企業経営研究所 理事長)
- ・植田 勝智 委員 (ファルマバレーセンター センター長)
- ・川村結里子 委員 (株式会社結屋 代表取締役)
- ・鈴木 誠一 委員 (株式会社エステック 代表取締役)
- ・三船美也子 委員 (一般社団法人日本親子体操協会 理事)
- ・矢嶋 敏朗 委員 (日本大学国際関係学部 国際総合政策学科 准教授)

○欠席者(委員)

- ・長倉 一正 委員 (有限会社長倉書店 代表取締役)

コロナ禍に伴う社会環境の変化及び今後のまちづくりに必要な視点について話し合った。

1 コロナ禍に伴う社会環境の変化について

・ネットを使えば様々な情報が集まり、会合ができる。直接の交流がなくても、いろいろなことができると気付いた。東京と清水町の距離感が大きく変わっていくと感じている。これまでは、どうやって東京の人々を清水町へ移住してもらおうか考えてきたが、むしろ、東京への集中や“密”な状態のリスクが初めて認識されてきている。若い人の間では「田舎で暮らしたい」という人の割合が一気に上がっているようだ。

・オンラインの会議では、一生懸命勉強して一生懸命アウトプットしないと、会議自体に乗り遅れてしまうため、勉強するという意識が高くなったが、2倍、3倍疲れる。ではどうするかというと、自然が豊富なところでゆっくり

自分を癒す。田舎に住みたい若者も増えると感じた。

- ・今までは、子育て支援のサービスが充実し、親子で出かけられる場所もたくさんあったが、子どもたちを守るためにはなかなかそういうところにも出かけられない。子育て中のお母さんたちが相当のストレスを抱えていることが、アンケートなどからもわかった。LINE でつながっている人たちに体操の動画を送ることくらいしかできなかつた中で、人と交わってふれ合って、という事が心の健康にすごく大事だということがわかった。

- ・多くの大学はほとんどオンライン授業になっていて、慣れてきている学生もいれば、逆に精神的に参ってしまっている学生や教員も出てきている。大学2年生は面談もすべてオンラインでやっているが、人間性まではわからない点が課題である。

- ・このような状況下だと、三島に学部がある意味があるのか、疑問に思うところがある。学生には、卒業後、清水町や三島に住んでもらいたいと思う。清水町や三島に暮らしながら地元の学校に行って、勉強もバイトもする、将来はここに住むという学生を育てないと、学校も三島にある必要がない。地域と連携しながらどのように存続していけばいいのかを考えている。

- ・国と国との往来に飛行機が使われないので、航空機業界は今ほど底の状態だ。しかし、コロナ禍の中で勉強する時間は十分にあって、小さい企業にもチャンスがある。航空機業界は途中から入るのは難しいが、今勉強していけば世界に打って出ていけると思う。新しい業種が生まれる局面でもあり、いいチャンスととらえている。

- ・医療用の防護資材の入手にたいへん苦勞した。原材料の不織布は主に中国で生産されているが、部材やマスク等の価格がどんどん跳ね上がり、かなり費用が嵩んだ。国内で縫製するコストがかかっても、輸入より確実に品質が良く信頼がおける製品ができるのではないか。

2 今後のまちづくりに必要な視点

(1) 柿田川の活用

- ・活用しようと考えてきた柿田川が、活用されていないと感じる。緑は守られたが、水辺に近寄ることができず、人を遠ざけてしまったと思う。柿田川

を清水町の資産として将来に役立てようとするなら、柿田川の“ありよう”についても一度しっかりした議論をしなければならない。自然保護は重要だが、それと両立できる解を見つけ出さないと、清水町が失われてしまうと感じた。

・柿田川については関係団体としっかり議論し、これまでの保全への取組にはきちんと敬意を示しつつ、守り続ける以外の取組も考えるべきだと思う。

(2) デジタルに特化したまちづくり

・前回までの「清水町は小さな町だから尖ったことを」という話の流れでは、デジタルに特化したことをやる、というのも良いと思う。疲れたら狩野川を散策したり、都会に行きたいという場合もすぐ近くだ。

・積極的に企業誘致をすすめてはどうか。さまざまな人々がデジタルで仕事ができる環境を用意し、東京の大企業を超えて、世界中に拠点を求めるグーグルなどの世界企業にアタックするというのも、将来の夢としてあってもいい。そんなことを考えられるほど、大きな変革が起こる時代だと思う。

・子どもの学習環境について話題に上ったように、IT を利用した環境とそうでない環境をいつでも切り替えられるということが大切で、さらにこういった環境が、どんな世代の人にも平等に提供されることが重要だと思う。

(3) 変容する力

・仕事やコミュニケーションのあり方が変わってきている中、柔軟に変容する力とソーシャルビジネスの視点が必要となり、より地域に求められてきていると思う。生きるための武器をいかにたくさん持つか。地域に育むか。

・今ある“業”がなくなるかもしれない、という認識の上で、お金を生む視点をマインドとして持っていないと、この先、生きていけない。行政も一緒に柔軟に変容する力が大切だと思う。「変わっていける力」「社会にビジネスを作る力」というのをスローガンにしてはどうか。

・移住という観点では、働き方や暮らし方を選択するという時代の兆しがあり、都内の方もそういう機会を持ちたいと思っている。しかしそのためには地方との接点を持たないとだめだ、ということで、どれだけ清水町が開いて、関わりを作っていくか、いかに作れるかが重要だ。また、うちの地域だけという作り方より、より遠い地域や世界とつながれるという視点があると面白

い。

・子供たちのオンライン会議システムの活用について、使い方を習っているA地区はできるがB地区ではできない、という話があった。こういった教育格差を生まない地域づくりは重要だ。

(4) 新たな産業構造の構築

・常日頃は安価な製品を、緊急時には備蓄として放出する、という何らかの行政的仕組みが必要だと痛切に感じた。

・コロナ禍を機に、日本の^{※2}サプライチェーンをもう一度考え直した方がいい。海外に出てしまった技術をもう一度国内に。今がチャンスだ。首都圏の方に新たな仕事の場を提供し、移住を促すことにもなる。

・清水町には、航空機産業や鋳造業界をリードしている企業もある。こういった企業を軸に高付加価値の産業を育成していくことも重要だし、柿田川も、自然を壊さずに活用する方法はあると思う。

(5) まちづくりの対象

・ここでくらしている人に住みやすいまちというのは良いが、それはどの町でも目指していることだ。外から清水町に行ってみようかなと思った人の目には多分止まらないと思う。もう少し引き付けるようなものが必要ではないかと感じた。

・近くにがんセンターがあり、町内の病院の数も多い。交通手段も含めてこれらをどうネットワークして、高齢者がすすんでこの町に来たくなるような形に仕上げていくか。

・誰を対象にまちづくりをすすめるのか。今住んでいる人なのか、それだけでなく、この町に住みたい、働きたいという人を増やすのか、最初に軸を決めた方がいい。まちづくりは、将来を見ないとだめだと思う。外から見て住みたくなるようなまち、働きたくなるまちにするにはどうしたらいいか、そういった視点を加えてこれからの議論をすすめたい。

※1 ソーシャルビジネス … ビジネスとして社会課題の解決に取り組む活動

※2 サプライチェーン…商品や製品が消費者の手元に届くまでの、調達、製造、在庫管理、配送、販売、消費といった一連の流れ